

園の取り組み事例②

大阪市立 山王保育所（大阪府・公設置民営）

保護者に伝わりやすく、 園内研修・業務の簡素化を兼ねた ドキュメンテーションを実現

取り組みの ポイント

- 近年急増する外国籍の保護者にも伝わりやすいように、動画配信を取り入れたドキュメンテーションを作成。子どもの育ちを捉えて発信する作成過程を、園内研修と兼ねる。
- 1年間を通して、クラスごとに1日に2組限定で保護者の保育参加を受け入れ、保育者の思いや子どもの姿を共有する。

だれに対しても伝わりやすいドキュメンテーションを追求

外国籍の子どもが増え 保護者との意思疎通が課題に

大阪市立山王保育所は1963年に開園後、約半世紀がたった2012年より社会福祉法人白鳩会が委託運営を行っています。同園では近年、中国やベトナムを中心とした外国籍の子どもが急増し、全園児の35%以上に達しています。外国籍の子どもは、日本語をある程度話せる子どももいれば、来日したばかりの子どももいるなど、状況はさまざまです。言葉でのコミュニケーションが難しい場合でも、子ども同士はすぐに仲よくなり、保育者もジェスチャーなどを交えて子どもと意思疎通を図っているため、保育に大きな支障はありません。

一方で、難しさを感じているのが保護者とのコミュニケーションです。保護者の中には日本語をほとんど話せない、あるいは会話はできても文字が読めない人もいます。そのため、おたよりや口頭で園の予定を説明しても、伝わらないことがよくありました。例えば遠足では、自国にお弁当の

お話しして下さった先生方



園長

武藤英嗣朗先生



主任

松田沙弓先生



副主任

竹内由喜恵先生

文化がないため、お弁当箱の中にお菓子だけを詰めて登園してくる子どももいました。そうしたことから、同園では中国籍とベトナム籍の保育者をそれぞれ採用。保護者との会話の通訳や電話連絡の代行をお願いして、意思疎通を図っています。

活字離れなども踏まえて 情報発信のあり方を再考

それでも日常的なコミュニケーションの取りづ

らさは残り、園長の武藤英嗣朗先生は、特に子どもの育ちを共有することに課題を感じていると話します。

「大切な話のときは通訳を入れますが、通訳を入れるほどではない『子どもたちはこんな遊びをしていますよ』といったなにげない会話から保護者との関係性が深まり、子どもの育つ姿が伝わることも多いものです。そうした実は大切な意味をもつ日常的なやり取りが難しいと感じていました」

また、武藤園長は外国籍の子どもの増加とは別の要因でも、保護者とのコミュニケーションのあり方を考え直す必要性を感じていました。

「以前は毎月の園の活動を文字が主体のおたよりで発信していましたが、若い世代の活字離れが進んで内容がうまく伝わらないばかりか、目を通していただけないこともありました。そのため、10年ほど前から写真を交えるようにはしていましたが、十分とはいえ、もっと伝わりやすくする工夫が必要だと思っていました」(武藤園長)

そうした課題意識に加え、コロナ禍で保護者と対面する機会が減少したこともきっかけとなり、毎日及び毎月作っていたドキュメンテーションを、2021年から見直すことにしました。

動画を組み込んだドキュメンテーションを作成

ドキュメンテーションの見直しにあたり、武藤園長と保育者は「保護者が知りたい内容とは?」「日本語がわからない保護者にも伝わりやすくするには?」などの議論を重ねて、文字フォントにまでこだわったフォーマットを、基本的なオフィスソフトを用いて作成しました。こうして写真とコメントを中心とした構成で、動画共有サイトでの動画配信も活用したドキュメンテーションの方向性が固まりました。

ドキュメンテーションはクラスごとに作成しており、「今日の1場面」として、その日の保育のハイライトを紹介(写真1)。その活動がどのような思いで行われ、どういった育ちにつながるのかを



写真1 毎日のドキュメンテーションでは、写真とともに、子どものつぶやきや思いをコメントとして掲載。つぶやき以外にも、発語のない子どもの思い、保育者の言葉、状況の説明などを、異なる吹き出しで表します。

発信しています。フォーマットをもとに当日の写真をあてはめて、吹き出しにコメントを書き入れるだけなので、毎日作成する負担感はあまりないといいます。実際に保育者は、午睡の時間などに20分ほどで作っています。そうしてできあがったドキュメンテーションは、保護者の目に入りやすいエントランス近くの廊下に並べて掲示します。

毎月のドキュメンテーションもまた、毎日作成したものをベースとするため、ほとんど手間がかかりません。毎日のドキュメンテーションの中から、子どもの育ちがもっとも伝わりやすい1枚をセレクトし、「保育士の気づきレポート」として保育者による振り返りを書き加えます(P.5写真参照)。さらに、保護者からの要望が多い食育に関してまとめたページを加えて、「おたより」として発信しています。

限定公開の保育動画は、週1回、クラスごとに作成します。ドキュメンテーションに二次元コードを掲載して、スマートフォンなどで手軽にアク

セスできるようにしました。

「1回の動画は長くても3分程度です。よいシーンはねらって撮れるわけではありませんし、撮影が大変になりすぎないように、子どものありのままの姿を伝えようと話しています。編集をする必要はないとも話していますが、若い保育者は慣れていないようで、手早く編集をして配信するスキルに

は驚かされます」(武藤園長)

動画のよさは、家庭で話題に上るきっかけになることです。一緒に視聴していた子どもが「このときこんなことがあったよ」と言って会話が広がることも多く、中には母国で暮らす祖父母に送って、子どもの姿を共有している家庭もあるといいます(動画の限定公開は事前に全保護者が了承済み)。

子どもの育ちを捉えて発信する過程に、園内研修の役割をもたせる

できごとの報告だけでなく 保育の専門的な視点から伝える

園の実践で注目したいのは、ドキュメンテーションを情報発信の手段として活用するだけでなく、園内研修としての役割ももたせていることです。

「保護者への情報発信以外にも、園内研修を充実させて保育の質を高めたいということずっと課題に感じてきました。しかし、日々の業務に加えて新たな取り組みを始めると、さらに負担感が増してしまいます。そこで、新しいドキュメンテーション作りが、一人ひとりの保育者の専門性を高める園内研修としてのしくみを兼ねるようにしました」(武藤園長)

ドキュメンテーションで伝える内容は、「その日のできごと」「子どものかわかった姿」といった報告にとどまらず、保育者の専門的な視点から子どもの姿を捉えることを意識するようにしました。そうした視点を養うために、週1回、クラスごとに担任が集まって子どもについて語り合うミーティングを設定。ミーティングでは、保育所保育指針の解説書を参照しながら、「3つの視点」「5領域」「10の姿」が目の前の子どもたちにどう表れていたかなどを話し合います。主任の松田沙弓先生は次のように話します。

「本園は複数担任制なので、各担任の視点から『〇〇さんは、最近こんなことに困っている』『△△さんにはこんな成長が見られる』などの気づいたことを出し合って、クラス内で情報共有を行い

ます。さらに、今月のクラス全体の育ちを振り返り、毎月のおたよりとして発信するドキュメンテーションをどれにするかを話し合います。こうした話し合いの成果で、保育のねらいを意識しながら遊びや活動をサポートする姿勢が、先生方に身についてきたと感じています」

話し合いに基づき、保育者は日々の保育で捉えた子どもの姿を、保護者とドキュメンテーションで共有しています。

『「園内研修の中身をそのまま保護者にお伝えしている』と言っても過言ではありません。とはいえ、専門的な内容は伝わりづらいので、子どもの育ちの観点は『どんな所が育ったの?』『何にであったの?』と言い換えるなどの工夫をしています」(武藤園長)

毎日、保育者が作りためているドキュメンテーションは、いずれ『「10の姿」の事例集』のような形でまとめたいと、武藤園長は考えています。

各クラス1日2組限定で 保護者の保育参加を受け入れる

園の理念や保育の内容などを理解してもらう上で、2021年から実施する保護者による保育参加「保育を楽しむ日」も、大きな役割を果たしています。以前は、大勢の保護者が一斉に保育に参加する保育ウィークなどを実施していましたが、「保育を楽しむ日」では各クラス1日2組までに限定。保育室の入り口に2か月分の予定表を貼って希望日を

記入してもらい、1年を通して受け入れています。

「特別なイベントではなく、日常の子どもの姿を知ってほしいというねらいで始めました。参加人数を絞ることで子どもは普段通りにふるまえますし、保護者も主体的に行動することができます。保護者にはわが子以外のさまざまな子どもと接して、子育ての楽しさや保育者の思いなどにも気づいてほしいと考えています」(武藤園長)

保護者が参加するのは登園時からお昼前まで。その間は自由に動いてよく、子どもと一緒に遊んだり、保育者の側に入って保育の手伝いをしたりなど、思い思いの様子が見られます(写真2)。初めはわが子ばかりを見ていた保護者も、次第に全体を見渡して、ほかの子どもとも接するようになっていきます。また、参加した保護者には、自由を選んだ1冊の絵本での読み聞かせを依頼。子どもにとって普段とは違った読み聞かせが楽しく、保護者にとっても保育に参加した実感がもてる体験となっています。ベトナム出身の保護者がベトナム語の絵本の読み聞かせをしたときには、子どもたちは異文化を感じ、目を輝かせて聞き入っていたといいます。保護者の活動の終了後には保育者との懇談の場を設定。その日の感想を聞くだけでなく、1年を通じた保育の流れや子どもの姿などを説明する機会としています。

「保育を楽しむ日」は非常に好評で、年間で9割以上の保護者が参加し、複数回参加する保護者もいます。現在はほぼ毎日、どこかのクラスに保護者が入っていることが自然な光景になりました。副主任の竹内由喜恵先生は次のように話します。

「私たちにとっても、常に保護者がいることが当たり前になり、いつもの保育を見てもらおうという姿勢になりました。そうした雰囲気の中で参加する保護者もまた、私たちの子どもへの声かけや、園で使っている食器などの道具を見て、ご自身の育児のヒントにされることもあるようです」



写真2 9割以上の保護者が参加するという「保育を楽しむ日」。保護者にとって保育のねらいなどを知るとともに、自分の子どもが集団の中でどう過ごしているかなど、普段は見られない子どもの姿に気づききっかけになります(左手前の女性が保護者)。

保育参加を体験した保護者の多くは園の思いを理解して協力的になり、保育者とのコミュニケーションもスムーズになっていきます。

保護者との関係づくりを進めつつ、保育の質を高めていく取り組みは、「やっと形ができてきた」段階だといいます。これからも新たなチャレンジをしていきたいと、武藤園長は意気込みを語ります。

「本園が委託運営に切り替わった直後は、保育の様子が保護者に見えなかったため、多くの戸惑いの声があったと聞いています。そこから少しずつ改善を重ね、一つひとつの取り組みが線としてつながってきた結果、今、いわゆるクレームはほぼなくなりました。これからも、本園が理念に掲げる『子ども同士認め合い、助け合い、励まし合い、学び合う』保育の実現に向けて、取り組みを充実させていきたいと考えています。何かをイチから始めるのは大変なので、既存の取り組みにどうすれば付加価値をプラスできるか、同時にどうすれば業務を簡素化できるかを考える。そして、全員の同意が得られなくても、まずはカタチにして、共感してくれる人を探し、少しずつでも進めていく。そうやって、チャレンジを続けていきます」

大阪市立
山王保育所

国際色豊かな仲間たちと出会い、多様な文化や価値観に触れながら成長していく保育を重視。サッカー教室や運動遊び、絵画など、多様な教育・保育プログラムを展開している。

- ◎ 園長：武藤英嗣朗先生
- ◎ 所在地：大阪府大阪市西成区山王1-6-10
- ◎ 園児数：97人(2024年2月時点)